

に白人が経営する牧場で使役されるようになった。そんな彼らが土地権を獲得し、ふたたび自分たちで社会運営できるようになったのは、一九七〇年代以降である。

当然、伝統的な狩猟技術の多くが失われた。今日で

# 生命あふれる大地

## アボリジニの世界

保莉実

□5□

ダグラグ村に暮らし始めてしばらくすると、狩りに誘われるようになった。

十九世紀半ば以降、オーストラリア北部では牧場開発が進んだ。白人入植者による初期の殺害をまぬがれたアボリジニも、狩猟採集生活を追われ、半ば強制的

### 現代の狩猟

# ライフル携え4WD車で

ぶのが分かる。毎年、何台かの車が川渡りに失敗して流されている。

車を走らせているとき、老人たちはその土地にまつ



ライフルで撃ち落としたごちそうの鳥

突然若者が叫んだ。「ここだ、止まれ！」

僕以外の全員が同じ方向をむいて、なにやらあわただちに魚を与えてください

歌いかける。「私たちは、何処ぞこのカントリーの者です。子供たちがお腹をすかせています。どうぞ私たちに魚を与えてください」

(歴史学者―新潟市出身)

進むので、いつ車がひっくり返るかと気が気でない。川渡りは特に不安だ。水深が深いと車体がすこし浮か

わる神話物語を歌うことがある。こうやって移動の最中でも、自分たちと土地との霊的な結びつきを強めて

だしく喋っている。僕には何も見えない。「ほら、あそこにかンガルーがいるだろう？」

すると湖沼は、彼らの声を聞きとり、よそ者や敵でないことが分かると食べ物分け与えてくれる。フナやカメ、そして体長一尺以上の巨大ナマスが何匹も釣れる。ライフルを持った男は、周囲を歩いて鳥やゴアナ(オオトカゲ)をしとめてくる。女性たちは木の実や果実を集めることが多い。

いや、さっぱり。草木が邪魔して全然見えない。

ライフルを持った男が車から降りて静かに数歩前に出る。息を殺してライフルを構える。相変わらず、僕だけが何も見えていない。

ズドーン！

しばらくして数人の男たちがカンガルーを抱えて帰ってきた。

目的の湖沼に到着すると、まず老人がその土地に「日本ではサシミと違って生魚を食べる」と答えると、「ウソだろう、信じられない！」という顔をされた。

獲物は、その場で焼いて食べる。焚火を囲んでの小宴会だ。互いにとりやって獲物をしとめたのかを自慢しあう。食べきれない分は、ダグラグ村にもち帰って親族に配る。

信じてもらえないかもしれないが、トカゲやカメや木の実は意外に美味しい。野生の食材は、人工的に育てられた農産食品よりもずっと栄養価が高いという。

アボリジニの友人が、「おまえのカントリーでは何を食べるんだい？」と尋ねた。

(火曜日掲載)